

ウエルネ特集1 「異常気象」への対応

気象情報を正しく理解する

「異常」が「通常」になる時代
——記録的な猛暑や大雨など、近年は、異常な天候が増えているように感じます。

たしかに「異常気象」という言葉をよく耳にするようになりましたね。実は気象庁の使う「異常気象」はその場所でも滅多に起きないが、たまには起きる現象です。しかし、近年は、災害が起きやすい場所では、30年に1度レベルのことが10年に1度など頻度が上がっている印象があります。今年(2018年)も7月に埼玉県熊谷市で日本の観測史上

最高の41.1℃という高温を記録しましたが、これは埼玉だけの話ではなく全国各地で「観測史上1位」が記録されました。また同じ7月には全国各地で「史上最多雨量」が観測されるという大雨もありました。

——日本を東から西に進んだ、変わった台風もありましたね。

台風12号ですね。あれも異例の現象でした。実は、逆進行の台風は、3年前にも一度あったのですが、観測史上この2度だけで、他には例がありません。私が気象予報士になった10年前には「台風は東から西に進むことがある」という試験問題があれば、正解は×だったのです(笑)。そういう意味では、今や「異常」が「通常」

Interview

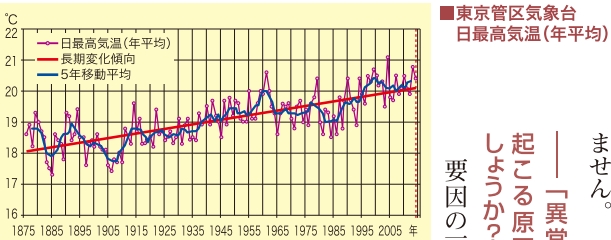


気象予報士・防災士
蓬菜 大介 さん

記録的猛暑や大豪雨、竜巻など、極端な天候が頻発する昨今、私たち一般生活者も気象災害への心構えが必要です。気象情報の意味や天気予報の上手な活用法などについて、気象予報士の蓬菜大介さんに伺いました。

になっていると言えるかも知れません。

——「異常気象」がひんぱんに起こる原因は地球の温暖化でしょうか？



要因の一つとしては、それもあ

ると思います。ただ、すべてを「地球温暖化」で片付けてしまうのは無理がありますね。東京の最高気温は100年前に比べると平均で2℃以上高くなっていますが、一方では今年1月に東京都内で約50年ぶりに「最低気温マイナス4℃」を記録したように、

寒さも極端になっています。

天気予報を活用して 災害に備える

——「極端な気候」が増えるなか、どのような対応が必要でしょうか。

滅多に起こらないはずの異常気象が頻発する時代ですから「自分の身は自分で守る」という防災意識が大切です。気象キャスターとしては、天気予報をうまく活用して気象災害への備えをしてほしいですね。気象衛星やスーパーコンピュータなど、技術の進歩によつて天気予報の精度は昔に比べて相当高くなっていきます。今年の猛暑や西日本豪雨、台風進路などもある程度は事前に予測でき、私も情報を天気

予報でお伝えできました。

——天気予報を見るときに注意すべきポイントがあれば教えてください。

たとえば「気象警報」とは何を意味しているのか、正確に理解している人は意外と少ないようです。これは各市町村が「過去に起きた災害」を元に発令基準を決めたものです。たとえば大雨警報ならば「その地域で、その雨量のときに、土砂崩れや川の氾濫などの重大災害が過去にあり、今回もそのレベルの災害が起る可能性がある」という情報である、ということを認識しておく必要があります。

また現在は「注意報」と「警報」の上に、さらに「特別警報」があり

ウェルネ特集1

「異常気象」への対応

ますが、これを単純に上・中・下の
ような3段階と捉えるのは大き
な誤解です。実は「特別警報」と
は「警報」の基準をはるかに超え
る現象が増え、「警報」だけでは注
意喚起ができないことから5年前
に新たに設定されたもので、「50
年に1度の重大災害」が起きる可
能性が極めて高い時に出されま
す。ですから「特別警報」が発表さ
れた時には、すでに何かしらの気
象災害が発生している状況です。
「ただちに命を守る行動をとって
ください」などと気象庁が言うの
もそのためです。概に「避難所に
行ってください」とは言えない、
場合によると屋根の上に逃げる
しかないような、異常な状況であ
るということです。

ふだんから自然と親しむ
ことも大切

——これからも異常気象はますます
増えていくのでしょうか？

先に言ったような「極端な気
象状態」が、少なくともここ10年
は続いているのは事実です。だか
らといって「来年も異常気象が起
きる」とは言えませんが、起こら
ないという理由もありません。私
の経験から言うと、全く起きたこ
とがないことが起きる異常気象
というよりも、過去にもある大雨
(大雪)条件で「観測史上1位」
になる異常気象、「極端な天候」
は考えておいた方がいいでしょう。
怖い話ばかりでしたが、私
たち気象キャスターとしては、気

「24時間で200mm」が
一つの目安に

他にも天気予報ではよく「1
時間に○mmの雨が降る」とか「最
大風速○m/sの風が吹く」などと
数字をしばしば言いますが、それ
らの数字がどの程度の危険なの
か知っておくことも大切です。た
とえば台風の風では「風速25m/s」
が一つの目安です。これは「人が
立つていられない」レベルの風です。
これが風速40m/sになると「車が横
転する」レベルの暴風になります。
雨の量では「1日(24時間)降
水量が200mm」という数字が、
天気予報を見るとき一つの目安
になるでしょう。この雨量を超え
ると土砂災害や川の氾濫などが

象災害など「自然の危険」を避
けるためにだけでなく、自然を
楽しむことにも天気予報を活
用してもらいたいですね。お花
見や紅葉狩りに出かけたり、近
くの山や川辺を歩いたり、夕焼
けや流れる雲を眺めたり、ふだ
んから身近な自然とふれ合う機
会をもつてほしいです。自分の周
囲の自然のあり方を知っておく
ことで、たとえば川の水がどの程
度増えたら危険なのかも分か
ります。自然との距離感をつかむ
ためにも「離れる・逃げる」だけ
でなく、自然に「近づき・親しむ」
ことも、防災行動の一つではな
いかと思えます。

——ありがとうございました。

発生してきます。もう一つ「1時
間雨量が50mm」という数字も目
安です。一般に都市の排水処理設
備はだいたいこのレベルを基準に
作られており、1時間50mmを超
えると溝やマンホールから水があ
ふれて道路が冠水する可能性があ
出てくるからです。

竜巻注意情報(都道府県ごと)

竜巻が発生するおそれがある積乱雲が
発生した場合発表(目先1時間は注意)

記録的短時間大雨情報(市町村ごと)

その場所で数年に一度しかないような
猛烈な雨が降っている時に発表
(外では災害が迫った状態)

土砂災害警戒情報(市町村ごと)

大雨警報が発表されている状況で
土砂災害の危険が特に高まった時に発表
自治体が住民に避難を呼びかける目安の情報

■すでに荒れた天気になっている時に出る情報

■蓬菜大介さんのプロフィール

1982年生まれ、兵庫県出身、早稲田大学政治経済学部卒。
モデル、芸能事務所等を経て、2009年の気象予報士試験
に合格。ウェザーニュースの契約キャスターとして、2011年
から読売テレビで情報・報道番組等の気象キャスターを務
める。明日の天気のポイントをクレヨンで描いたイラストで
伝える「スケッチ予報」も好評。2016年には『気象予報士蓬
菜さんのへぇーがいっぱい!クレヨン天気ずかん』を出版。
「好きなお天気キャスターランキング」で上位にランクするな
ど人気の気象予報士として多方面で活躍中。

●蓬菜さんのホームページ <http://hourais-office.co.jp>

蓬菜さんの著書▶▶▶

『気象予報士・蓬菜さんのクレヨン天気ずかん』(主婦と生活社)

